

拝啓

暑い夏が終わり、朝晩涼しい頃となりましたが、お元気でお過ごしのことと思います。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。第 66 号をお送り致します。

石井和夫さんの奥様の葬儀の会葬お礼に頂いた図書券カードで、何か記念になる本をと思い、岩波文庫の『後世への最大遺物』(内村鑑三著)を買って読みました。これまで、3~4度は読んでいたと思いますが、実に迫力のある講演だと思いました。明治 27 年、箱根芦の湖畔で開かれたキリスト教徒夏期学校での、内村先生 33 歳のとき講演です。その 3 年前、一高不敬事件で一高をやめ、新潟、大阪、熊本、京都と職を求めて転々と住所を変え、貧乏の極致にあり、京都に奥様と生れたばかりのルツ子さんを残しての箱根講演でした。

まず、後世へ残すべきものとして、金を上げます。金をもうけて、慈善事業に用いるという考えです。しかし、誰でもが、金儲けの才能があるわけではない。次に、事業を挙げます。箱根芦の湖のかんがい用の隧道工事、リビングストンのアフリカ伝道、クロムウェルの事業などを例に上げます。しかし、これも誰でも出来るわけではない。

次に、著述をあげます。新約聖書、日本外史、ロックの著書等の例を挙げます。特に、ロックの思想が、アメリカの独立、フランス革命、イタリアの独立等を招いたことを挙げます。しかし、誰でもが著述にむいているわけではない。

最後に、誰でもできることとして、勇敢なる生涯をあげます。パウロの生涯、カーライルが「フランス革命史」の原稿を人に貸した際、誤って燃やしてしまわれて、いったんは失望落胆したが発奮して書き直した例、二宮金次郎の生涯などの例を上げます。そして講演の最後を「あの人はこの世の中に生きている間は、真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのことを後世の人に遺したいと思います。」と結んでおられます。

石館基さんは、この本を読んで発奮し、洗礼を受けたといわれるし、角本良平さんは、昭和 15 年ごろ、南原先生から、読むべき 3 冊の本の 1 冊として、この本を勧められたそうです。私も、今回読み直して、内村先生の雄弁ぶりに驚きました。東西の歴史的なエピソードをふんだんに紹介しながら、ぐいぐいと引っ張っていきます。実に名講演で、どうぞ皆様も、改めてこの本を読んでみてください。若い人には感銘を与えるでしょうし、年を取られた方には、同感に思う点が多いと思います。

秋へ季節の変わり目、どうぞ御身体御自愛の程、祈り申し上げます。

平成 19 年 9 月 27 日

山口周三

エンカウンターの読者各位